

「アカウントビリティー」

二年前に埼玉の獨協大学から、評価について話してほしいという依頼が、そこで学生部長をしている友人を通じてあった。初めは学長と食事をしながらの懇談ということであったのが、その二日前に、教職員全員に話してほしいということになって、二時間の講演会になってしまった。ちょうど次の日は、夕方から、東京で飲みながらの会食が予定されていたので、鎌倉の家に帰ったのは午前一時を回っていた。初めは、カナダの大学の事情を話せばよいと思っていたが、一応講演会となると、こちらの事情の紹介というわけにもいかないので、「構造改革-リストラと評価」という題を考えていたが、どうもしっくり行かない気がしていた。依頼は、文部省から、評価を導入せよというお達しをもらったが、やり方は勝手にやれで、どうやっていいか分からないのでということだった。教員の中には、学生に教員の学識を評価させるとはもっての外という意識が強いということだった。こういう受け取り方は私にも分からないわけではないが、自分の経験では、学生の評価は自分のコースや教え方を考えるのにずいぶん役に立つと思っている。

前の晩はかなりの酒も入っていたので、すぐ寝ることにし、講演は翌日の午後四時からであったので、午前中は考える時間があるなと思った次第。翌朝目が覚めて、朝風呂に浸かりながら、はっと思い当たった。「アカウントビリティーと評価」だと。以前からなんとなく考えていたことが、急にまとまった気がして、後は割とスムーズに梗概をワープロでものすことが出来、二時間半かかる電車の中で、細かい点を書き入れて行った。専門が言語学なので、意味論的な問題から入ることにした。

日本語には、アカウントビリティーにあたる訳語も概念もなく、辞書を見るとレスポンスビリティーも、両方とも「責任」になっていることが分かる。もちろん、「社会的責任」といえば、アカウントビリティーに近くなるが、責任という言葉には、「責任を取れ」というような、誤りをしでかしたときに相手をなじったり、自分を責めたりする響きが強い。どちらかという、道義的責任という色合いが濃い。これに対して、アカウントビリティーの方は、「責任義務」とでも訳したらいいような、決められた仕事をきちっとする、何らかの決定を行う場合は、その理由や方法をはっきり説明する義務があること、などの履行義務を含んだ責任である。であるから、大学の教員でも、なぜ、どんな理由で、どういう風に教えているか、というような質問を受けたら、それを説明する義務があることになる。アカウントブルというのは元々可算可能という意味であるから、それが評価の対象になるわけである。教師が、一年間の授業内容をちゃんとこなしたか、教え方はどうだったか、試験は公平だったかという

ような点について学生が評価を下すことになる。日本でこういう考え方が育たなかった一番大きな理由は、契約という概念が育たなかったことにあると言えよう。契約があつてこそ、履行義務、成功度、失敗に対する責任という考えが出てくるわけで、物事を処理する過程における責任もこのアカウンタビリティの要素となっている。日本文化では、人及び社会に迷惑をかけた時に関わってくる道義的責任という点に重点を置いているようである。アカウンタビリティには感情の入る余地がない、義務履行・不履行の責任と言ってもよいかもしれない。骨子としてこんな話を獨協大学で二時間ぶつたように記憶しているが、準備不足であつたとはいえ、割合後味のよい話が出来たと思った。

後日、友人からカセットテープが送られてきて、獨協大学では教職員全員にテープが配られているという話であつた。録音をしてもよいかと聞かれたのは覚えているが、まさかこんなに大袈裟になろうとは思っていなかつたので、少々こそばゆい気持ちであつた。翌年、関係者と飲みながらの話で、課長なる人が、獨協の今のバズ・ワードは何だと思えますかと聞くので、アカウンタビリティかと言うと、そうですとのことであつた。最近、インフォームド・コンセントという表現が盛んに話題になっているが、これなども、まさにアカウンタビリティの問題であつて、日本の文化に欠けていた概念を輸入したものであろう。異文化間コミュニケーションの点でも、外国文化との接触の中で、少し深いところでの相互理解が生まれているのはうれしいし、その一端を担えるのもありがたいことだと思っている。

1997年5月29日 トロントにて
太田徳夫

[語彙]

埼玉	さいたま	Saitama prefecture
獨協大学	どっきょうだいがく	Dokkyo University
評価(する)	ひょうか	evaluation
依頼(する)	いらい	request
学生部長	がくせいぶちょう	Dean of Student Affairs
通じて	つうじて	through
初め	はじめ	at the beginning
懇談(する)	こんだん	familiar talk
教職員	きょうしよくいん	teaching and support staff
全員	ぜんいん	all members
講演会	こうえんかい	lecture meeting
予定(する)	よてい	schedule

鎌倉	かまくら	Kamakura City
事情	じじょう	situation
一応	いちおう	when it comes to
紹介(する)	しょうかい	introduce
構造改革	こうぞうかいかく	restructuring
題	だい	theme
考える	かんがえる	consider
文部省	もんぶしょう	Ministry of Education
導入(する)	どうにゅう	introduce
達し	たっし	directive
勝手に	かってに	freely
学識	がくしき	scholarship
意識	いしき	consciousness
経験(する)	けいけん	experience
翌日	よくじつ	next day
次第	しだい	situation
覚める	さめる	wake up
朝風呂	あさぶろ	morning bath
浸かる	つかる	soak
割と	わりと	comparatively
梗概	こうがい	summary
細かい	こまかい	detailed
点	てん	point
専門	せんもん	specialization
訳語	やくご	equivalent term in translation
概念	がいねん	concept
責任	せきにん	responsibility
誤り	あやまり	mistake, error
責める	せめる	blame
響き	ひびき	echo, voice
道義的(な)	どうぎてき	moral
色合い	いろあい	shade, tone
濃い	こい	deep
決定(する)	けつてい	make a decision
場合	ばあい	case
理由	りゆう	reason
方法	ほうほう	method
説明(する)	せつめい	explain
義務	ぎむ	duty, obligation
履行(する)	りこう	execution, implementation
含む	ふくむ	include

可算可能	かさんかのう	accountable
対象	たいしょう	object, target
授業	じゅぎょう	class
内容	ないよう	content
試験	しけん	exam, test
公平(な)	こうへい	fair
下す	くだす	pass, give
育つ	そだつ	grow up
契約(する)	けいやく	contract
成功(する)	せいこう	succeed
失敗(する)	しっばい	fail
対する	たいする	toward, against
物事	ものごと	things
処理(する)	しより	handle, treat, deal with
過程	かてい	process
要素	ようそ	factor, element
迷惑	めいわく	trouble
関わる	かかわる	have to do with, be related
重点	じゅうてん	emphasis
置く	おく	put, place
感情	かんじょう	emotion, feeling
余地	よち	room
骨子	こっし	gist
記憶(する)	きおく	memory
準備(する)	じゅんび	prepare
割合	わりあい	comparatively
後味	あとあじ	after taste
後日	ごじつ	later days
配る	くばる	distribute
録音(する)	ろくおん	record
覚える	おぼえる	learn, memorize
大袈裟(な)	おおげさ	exaggerated
翌年	よくねん	the next day
関係者	かんけいしゃ	persons concerned
課長	かちょう	section chief
最近	さいきん	recently
表現(する)	ひょうげん	expression
盛ん(な)	さかん	popular
話題	わだい	topic
輸入(する)	ゆにゅう	import
異文化	いぶんか	different culture
接触(する)	せつしょく	contact

深い	ふかい	deep
相互理解	そうごりかい	mutual understanding
一端	いったん	a part
担う	になう	carry on, assume

© Norio Ota 2000